

# ロシア中世都市における 手工業と手工業者 (II)

栗生沢 猛 夫

## 1

1237年に始まったモンゴル軍のロシア侵入とその後の240余年にわたるロシア支配（いわゆる「タタールの軛」）がロシア人の物質的、精神的生活に与えた影響の程度と性格を厳密に知ることはむづかしい。B・H・タチーシチェフ以来の長い研究の歴史においても、この問題に関する諸家の見解は多様である。だが見解の多様性は、異民族による侵入と支配とをどう評価するかに関わるもので、相つぐ侵入がもたらした直接的被害の大きさに関わるものではなかったように見える。被害が甚大であったことについては、若干のニュアンスの差がみられるにせよ、諸家の見解は一致している<sup>1)</sup>。

原稿受領日 1982年12月8日

- 1) モンゴル人のロシア侵入と「タタールの軛」およびそのロシアへの影響をめぐる問題に関する研究の歴史を知るには以下の文献が参考になる。B. Д. Греков и А. Ю. Якубовский, «Золотая Орда и ее падение», М.-Л. 1950, (以下 Греков/ Якубовский として引用) стр. 247-258. および文献目録 (стр. 431-443); В. В. Каргалов, «Внешнеполитические факторы развития феодальной Руси. Феодальная Русь и кочевники», М. 1967 (以下 Каргалов として引用), стр. 218-261; А. М. Сахаров, Les Mongols et la civilisation Russe, in: «Contributions à L'histoire Russe, Cahiers D'Histoire Mondiale» Numero Spécial 1958, pp. 77-97; А. М. Сахаров, Русь и ее культура в XIII-XV вв., в: «Очерки русской культуры XIII-XV веков». ч. 1. М. 1969 стр. 7-33. わが国における比較的最近の研究をあげると、最も包括的なのは、佐口透、『モンゴル帝国と西洋』平凡社、1970である。さらに加藤一郎、「モンゴル人によるルーシ支配の開始」『史潮』1981年第10号。進藤義彦「モンゴル・タタールのロシア支配」『アジア研究所紀要』（亜細亜大学）（1977）、がある。ただし後者は誤りが多く、形式的にも学術論文の体をなしていない。田中陽児氏の研究（「ノヴゴロド『民会』考」『白山史学』第九～第十一号（昭和38-40年）、および「1382年の汗軍モスクワ襲撃考」（上）『東洋大学文学部紀要』第29集、史学科篇I、1975）は欠かせない。

さて、ルィバコーフによれば、モンゴル侵入の影響がもっとも強く現われたのは、ほかならぬ手工業においてであった（第六章）。モンゴル・タタール人は農民をいわば放置したが、<sup>2)</sup>手工業者は捕え、連れ去った。彼らが武器をつくり、城塞を築き、様々な機械仕掛をつくり出すことを知っていたからである。ルィバコーフはプラノ・カルピーニやイランの歴史家ラシード・アッディーンに

さて、被害の程度について史家の間に若干のニュアンスの差があると書いたが、たとえば革命前のウクライナ人研究者のなかには、キエフがモンゴル侵入によって「破壊」されはしなかったことを説くものもいたし（M. A. マクシモヴィチ、B. B. アントノーヴィチ、M. C. グルシエーフスキー、B. B. フヴォイカなど）また「ユーラシア学派」などは、侵入の否定的影響にはもっぱらふれずにすませた。ロシア、ソヴェトの研究者のなかにも革命前の C. M. ソロヴィヨフや V. O. クリュチュエーフスキー—また革命後の B. B. バルトリドや M. H. ボクローフスキーなどは今日のソヴェトの研究者一般とは異なる見解をもっていた。これについては Каргалов, стр. 218 сл. および M. K. Каргер. «Древний Киев», т. I. М.-Л. 1958, стр. 490 сл. を参照のこと。また最近では Л. Н. Гумилев がその «Поиск вымышленного царства». М. 1970 において、モンゴルは自ら望んでロシア・西方遠征に旅だったのではなく、「世界史と世界政治の出来事のロジック」によって、遠征を余儀なくされたのであること、バトゥ遠征の破壊的影響は過大評価されてはならないこと（北東ルーシで苦しんだのは若干の都市だけであり、農村住民は森に難を避け、大きな被害はうけなかったこと）等を説いている。もちろんこれにたいして他のソヴェトの学者は激しく反発している。たとえば B. A. Рыбаков, О преодолении самообмана. «Вопросы Истории» (以下 «ВИ» と略記), 1971, № 3, стр. 153-159; П. П. Толочко, «Древний Киев.» К. 1976, стр. 194-195.

なお本稿ではおおむね「モンゴル人」という語が用いられるが、現実にロシアに侵入したバトゥ軍に入っていたモンゴル人はそれほど多くはなかった（Каргалов, 75 は 4~4.5 万と、また G. Vernadsky, «The Mongols and Russia» Yale Univ. Press 1970 (Fifth Printing), p. 49 も 5 万と推定している）。同時代のロシア人やヨーロッパ人は彼らをもっぱら「タタール」ないし「タルタル」人と呼んだ。その意味するところについてはさしあたり前掲、佐口『モンゴル帝国と西洋』50 ページ、さらに B. Spuler, «Die Goldene Horde. Die Mongolen in Rußland, 1223-1502». 2. erweiterte Auflage, Wiesbaden 1965, S. 11 をみよ。

- 2) Vernadsky, «Mongols and Russia», p. 341 はモンゴル側が、農民の生産活動を妨げる何らの動機をもたなかったとすら述べる。これにたいし V. B. Каргалов, Последствия монголо-татарского нашествия XIII века для сельских местностей Северо-Восточной Руси. «ВИ», 1965-3, стр. 53-58. (Каргалов, стр. 179 сл. 参照) はバトゥの侵入とモンゴル人のその後の度重なる侵入とがいかに農村を疲弊させたかをよく描いている。また Л. В. Черепнин, «Образование Русского централизованного государства в XIV-XV веках», М. 1960, стр. 603 はタタールが農業を国力の基盤とみなし、それを破壊する意図をもっていたことを主張している。А. Д. Горский, Сельское хозяйство и промыслы, в: «Очерки Русской культуры. XIII-XV веков.» ч. 1. М. 1969, стр. 34-39 もモンゴル侵入の農業への被害の大きさを強調する。結果的には農村も大きな被害をうけたと考えるべきであろう。これについてはさらに後述第5節をも参照。

よりながら、モンゴル人が被占領民手工業者を特別に取扱ったことを強調している。たとえばカルピーニによれば、モンゴル人は彼らに抵抗した者を手工業者と奴隷にする者とを除きすべて殺害したし、<sup>3)</sup> ラシード・アッディーンによれば、彼らはホラズム王国を7カ月にわたる攻撃の後に滅ぼしたとき、10万人の手工業者と工匠を選りぬいて東方へ連れ去ったという(526)。ところで手工業者といっても特に問題となったのは、技術水準の高い都市の手工業者であったことは想像に難くない。カルピーニは占領地域に君主や主人として住みついたモンゴル人たちが、最良の職人は自分らの直接の必要のために確保し、残りの職人には生計を支えるだけの食糧(毎日ごく少量のパンと週三度の少量の肉)を与えて生産品はすべて供出させる、と記したあと、これを「町に居住する技術者たちのための処置」とことわり書きをつけている<sup>4)</sup>。

ロシアの手工業者もカルピーニらが伝えるモンゴル支配下の手工業者一般と同様の運命をたどったことは当然に予想できる。もっともこの点に関する史料は以下に記すゾジマの例などを除いて極めて少い<sup>5)</sup>。リュバコーフはモンゴル支配の及んだ各地(西はベッサラビアから東はヴォルガ沿岸地方、南は北カフカースにいたる)に、モンゴル軍侵入直前にキエフで製造されたと考えられる様々な製品が散在していることを引きあいに出して、これをロシア手工業者がモンゴル人によって外国へ連行されたことを物語る証拠とみなしている(527-531)。すなわちリュバコーフによれば、各地で発掘された物品はロシア都市民の私物(礼拝用小聖像等)やキエフ手工業者の道具類、また婦人用の装身具などであり、これはそれらの物品の持主(すなわち手工業者、女・子供)がモンゴル人の地に拉致されたときに持参した、と考えるのが一番よいというのである。だがこれはあまり説得的な議論ではない。むしろ略奪やその後の交易によって

3) カルピーニ、ルブルク、護雅夫訳『中央アジア・蒙古旅行記』桃源社、1965、47ページ。

4) 同上53ページ。

5) この点に関し最近興味深い研究が現れた。M. Д. Подубояринова, «Русские люди в Золотой Орде», М. 1978. である。ことに本書の第一章「金帳汗国におけるロシア人に関する記述史料の報道」(стр. 8-48)は汗国におけるロシアの諸公とその使節、聖職者、奴隷、戦士、商人に関する情報を集めている。手工業者についても〈奴隷〉の項でふれられている。もっともここでも情報の量はさほど多くはないが。

モンゴル人地域に入りこんだと考えた方が自然である。それにこれらの物品も量的には多くはなく、全体的な傾向を確実に知るためには十分な史料とは言えない。それゆえ以上のことを論拠に、キプチャク汗国の文化の発展にロシア人手工業者が果たした役割を高く評価するルィバコーフの見解 (531-532) も仮説の域を出ないということになる<sup>6)</sup>。

このような状況のなかで異彩を放つのはカルピーニの伝えるロシア人手工業者コジマの例である。カルピーニはカラコルムの大汗 (グユク汗) の下で非常な飢渴に苦しんだとき、ロシアの黄金細工人コスマス (コジマ) に助けられたのであったが、このコスマスはグユク汗の「大のお気に入り」で、大汗が即位に際して使用した玉座と印璽を自ら作ったという<sup>7)</sup>。

かくして、具体的にどれだけの手工業者がモンゴル人によって連れ去られ、彼らがどのような生活を余儀なくされたかは、わずかに知られている以上のような事例から漠然と推測されるにすぎないのであるが、モンゴル人の侵入がロシアの手工業、就中、都市の手工業にたいし与えた被害が甚大であったことは、最初期の侵入直後のロシア都市の悲惨な状態から十分に窺うことができる。

1237年の冬も始まる頃、リャザン公国を手はじめにロシアへ侵入した15万といわれるモンゴル軍が、<sup>8)</sup>翌38年の初夏に一時南方ステップ地帯に姿を消すまでの間に、破壊されたり、占領されたりしたロシアの町は膨大な数にのぼった。まずリャザン公国ではプロンスク地方の諸都市 (プロンスク、ペーリ、イ

6) ただしПолубояринова «Русские люди» 第二章「金帳汗国領におけるロシア人の滞在を物語る証拠としての考古学資料」(стр. 49-129) は今日「知られているすべての考古学資料」を検討した上で、ヴォルガ沿岸、北カフカーズ、クリミア地方におけるロシア人の広範な存在と、金帳文化形成への彼らの寄与について、力説している。

7) カルピーニ、ルブルク、82ページ。Vernadsky, «Mongols and Russia» p. 63 は、このコジマのつくった玉座 (カルピーニ、ルブルク、82ページ) と「真赤なびろうどばかりでつくった…天幕」のなかの玉座 (同81ページ) とを同一のものともみなしているが、筆者には別物ののように読める。

8) В. В. Каргалов, «Конец Ордынского ига», М. 1980. стр. 7. もっとも Каргалов 75は東方の諸史料を批判的に検討しながら、12万~14万人という数字をはじきだしている。なお以下の叙述は主に、Греков / Якубовский. 207-217; Л. В. Черепнин, Монголо-Татары на Руси (XIII в.), в: «Татаро-Монголы в Азии и Европе» М. 1970, стр. 179-203 (とくに185-191); 就中、Каргалов, 82-132によっている。

ジェスラーヴェツ)が破壊された。そのうちイジェスラーヴェツはこの時をもってその存在を完全にやめてしまう。ついで首都リャザン——一方は川にのぞむ切り立った崖により、他の三方は9~10 mの高さにも達する土塁と深さ8 mの濠によって防禦されたスターラヤ・リャザン——も包囲が始まって6日目の朝(12月21日)敵の手におち、灰燼に帰した。その後モンゴル軍はオカ河畔の諸都市(オジスク、オリゴフ、ペレヤスラヴリ・リャザンスキー、ポリソフ・グレーボフ)を破壊しながらコロームナにむかう。コロームナでは当時のウラジーミル大公ユーリー・フセヴォロドヴィチの長子、フセヴォロド・ユーリエヴィチ公麾下のロシア軍がモンゴル軍を迎え撃つが、モンゴル軍はこれを撃破し、コロームナの町を破壊したあと、モスクワへむかった。当時いまだウラジーミル公国の一辺境都市にすぎなかったモスクワは5日間の籠城の後敵の軍門に降り、破壊された(1238年1月20日)。それから2週間後の2月4日モンゴル軍はモスクワより東北東200 kmにあるウラジーミル大公国の首都に達する。ウラジーミルは三方を川に囲まれ(南からはクリャズマ、東及び北からはルィベジ川)、城壁で守られた堅固な町であった。ことに大公の居住区である内城 *дегинец* に達するためには、攻め手は三重の防禦壁を突破しなければならなかった。たとえば西方から町に突入する場合、まず「新町」*Новый город* の土塁と城壁を、ついで「モノマフの町」(ないし「ペチェールヌイ町」)の土塁と城壁を、そして最後に内城の石の城壁を突破しなければならなかった。だが大公自身は援軍を集めるべく町を捨てて北方へと去り、首都を守る態勢は十分ではなかった。2月7日早くも新町が、翌日には内城も落ち、町は破壊され災上した。モンゴル軍はこのウラジーミル包囲の最中に、30 km 北方のスーズダリをも襲っている。

さて首都ウラジーミルを攻略したモンゴル軍はそこから主に三手に分れて進軍を続ける。バトゥの率いる主力は北方のロストフ方面へ、一部は東方のヴォルガ中流域(ゴロジエツ)方面へ、他の部隊は北西のトヴェーリ、トルジョク方面へとむかった。

そのうち主力軍はロストフを落とし、そこから二手に分れて一方はウグリチ

へ、他方はヤロスラヴリを破壊し、さらにヴォルガ川沿いにくつかの町を攻撃しながらコストロマにむかった。また東方へむかった部隊はスタロドゥップを落とし、ゴロジュツに達する。そこからさらにヴォルガ川沿いに多くの町を襲いながら北上し、コストロマ方面にむかった。一隊はガーリチ・メーリスキー、さらにおそらくは、ヴォログダにまで達した。北西方面にむかった部隊はまず5日間の攻囲の後ペレヤスラヴリ・ザレースキーを落とし、そこからいくつかの方面に分かれて進軍する。一部は主力軍を補強すべくロストフへ、他は元の道に戻る形でユーリエフ・ポーリスキーへ、残りは先へ進んでクスニャチンを攻め、さらにトヴェーリ、トルジョクへと進んだ。ユーリエフを落とした一隊もドミトロフ、ヴォロク・ラームスキーを攻めながらトヴェーリ、トルジョク方面にむかった。

さてモンゴル軍の一隊が2週間にわたる包囲の後トルジョクの町を落とした(3月5日)のと同じ頃、別の部隊はシチ川の河畔で大公ユーリーの軍を壊滅させていた。だがモンゴル軍はその後は戦闘行動を収束させる方向に動き、<sup>9)</sup>各地に展開していた部隊を南方のコゼリスク方面に集結させた。<sup>10)</sup>集結したモンゴル軍に対し、コゼリスク市民は7週間の長きにわたって抵抗し、多大の損害(4,000人とされる)を与えたあと全滅した。モンゴル軍はコゼリスクをおとしたあと、クールスクなどを破壊しながら1238年6月南方ステップ地帯へと去っていった。

バトゥのロシア遠征はこれで終わったわけではない。翌1239年の冬、彼らは再びリャザン公国に侵入し、前回被害を免れたムーロムやモルドヴァ人地方を荒

9) これとの関連で、モンゴル軍がトルジョク攻略後ノヴゴロドに進撃せずに引きかえしたことの理由をめぐって様々な推測がなされている。田中氏(前掲「ノヴゴロド『民会』考」(上)12ページ以下、及び(中)17-21ページ)は、従来の研究状況を批判的に紹介しながら、ノヴゴロド都民主政の発展という要素を考慮にいれるべきことを主張されている。他方 Каргалов 107 は、トルジョク攻略軍はモンゴル軍の一部にすぎなかったこと、この一隊は逃げる敵を追ってノヴゴロド方面に進出しただけで、はじめからノヴゴロドを奪取しようという計画などもっていなかったことを主張している。

10) モンゴル軍のなかにはトルジョクよりさらに西方スモレンスク方面にまで進出した一隊もあった。この一隊は Вшиж などを破壊した後にコゼリスク方面に退却した(Каргалов, 109-110)。

らし、クリャズマ下流域を進みながら、ニジニ・ノヴゴロドにせまった。春には一隊はドニェプル川方面に進み、南ルーシ防衛の拠点ペレヤスラヴリを攻め落とす。秋にはチェルニゴフ公国に攻めこみ、チェルニゴフを始め、プチヴリ、グルホフ、ヴィリ、リュリスク等の要塞を陥落させた。

翌1240年の秋モンゴル軍は再びロシアに侵入した。今回はドニェプル川を西へ渡り、激しく抵抗するロシア川沿いの諸都市を占領したあと北上して、ヴィチチェフ、ヴァシレフ、ベルゴロド等の町や要塞を破壊し、キエフに迫った。キエフはすでに昔日の如きロシアの政治的中心としての意味を失ってはいたが、依然としてロシア最大の都市であることには変わりなく、堅固な城壁に囲まれていた。だがここでもモンゴル軍を迎え撃つ体制は整っていなかった。この地方の諸公は内紛にあけくれ、当時キエフを領していたダニール・ガリーツキー公は不在であった。かくしてキエフは市民らの長い激しい抵抗にもかかわらず陥落してしまった(12月6日か?)。モンゴル人によるキエフ破壊のすさまじさは、カラコルムへの旅の往来に際しキエフを通過(1246-47年)したプラノ・カルピーニが200戸ほどしか人家が残っていない、と伝えている<sup>11)</sup>ところからも判断されよう<sup>12)</sup>。

モンゴル軍はその後さらに西方へ進軍する。主力軍はコロジャジン・ダニエロフを経てウラジーミル・ヴォルインスキーにむかい、そこで一部はベレスチエを攻略してポーランドにむかった。他の主力軍は南下してガーリチにむかい、別にスルチ川、テテレヴァ川上流、ゴルイニ川等の流域地方に展開していた一隊と合流してさらにハンガリーにむけて進軍していった。1241年の春のことであった。

さてモンゴル軍のロシア侵入はこれで終わったわけではない。それどころかアドリア海岸にまで達したバトゥは1242年3月、大汗ウゲデイ崩御の報をうけ

11) カルピーニ、ルブルク、38ページ。

12) キエフ陥落の様子については詳しくは、カARGER, «Древний Киев» т. I. 第九章「キエフとモンゴルの侵入」(стр. 448-518)を参照。陥落の日が正確に何日であるかについては、とりあえず M. K. KARGER, Киев и монгольское Завоевание, в: «Советская Археология» т. 11 (1949) стр. 84-86を参照。

て急遽全軍とともに引き返し、ヴォルガ下流域に都してキプチャク汗国を創建し、以後二世紀半にわたるロシア支配の基を築くことになったのであった。

ところで以上に、モンゴルのロシア侵入を直接の考察対象とするのではない本稿でバトゥのロシア遠征の経過を長々と書きつらねてきたのは、この侵入によって如何に多くのロシア都市が破壊され、灰燼に帰したのかを示そうと願ったからにはほかならない。この点についてより具体的なイメージを得るために最後に、1238年2月の1カ月間にモンゴル軍によって攻略されたロシア都市の数をみておこう。『ラウレンチエフスカヤ年代記』はバトゥ軍がこの月だけで14の町を奪ったと伝えている<sup>13)</sup>。B. B. カルガーロフは他の年代記の情報も合せてそれが次の諸都市ではないかと推察している。すなわちロストフ、ヤロスラヴリ、ゴロジエツ、ガーリチ・メーリスキー、ペレヤスラヴリ・ザレースキー、トルジョク、ユーリエフ、ドミトロフ、ヴォロク・ラームスキー、トヴェーリ、コストロマ、ウグリチ、カシン、クスニャチンである。カルガーロフはさらにB. H. タチーシチェフなどの記述から、スタロドゥップ、コンスタンチーノフ、ヴォログダの三都市を加え、これらの都市のリストは本質的に言って、「ヴォルガ上流地方およびクリャズマ川とヴォルガ川に囲まれた地方における、多少なりとも大きな都市のすべてを含んでいる」と述べている<sup>14)</sup>。

カルガーロフの作成した1238年2月にモンゴル軍によって攻略された都市のリストには若干の修正を加えることができる。まずこれにウラジーミルとスーズダリの二都市を加えなければならない。両都市とも2月初旬に攻略されている。次にトルジョクが陥落したのは、カルガーロフ自身が認めているように3月5日であるから、これを除外しよう。かくして1238年2月に攻略された都市数はその名の知られているものだけで18となるであろう。このなかには戦わずして降伏し、したがって激しい破壊にはあわなかったと思われるものもある(たとえば、ロストフ、ウグリチなど)<sup>15)</sup>。また攻略されたかどうか不明な

13) Полное Собрание Русских Летописей т. 1. вып. 2. М. 1962 стб. 464. なおこの数のなかには слободы や погосты などの聚落は含まれていない。город のみである。

14) Каргалов, стр. 97-98.

15) Каргалов, стр. 96 прим. 1.



都市も、さらには攻略されたとしてもそのときの様子が定かでない場合もある。だがいずれにしてもカルガーロフが言うように、ほとんどすべての重要な都市がこの時モンゴル軍の馬蹄にふみにじられ、その都市としての生命を一時的に、ないし永久に失って、廃墟 (городище) にならなければならなかったのである。

さて以上にモンゴル人の侵入がロシア中世都市に与えた被害が甚大であったことはおおむね示したように思う。都市手工業についても同様のことが言えよう。非常に多くの都市が物理的に破壊され、数多くの手工業者があるいは生命をおとし、あるいは連れ去られた。モンゴル人の侵入とともにかつてロシア人が誇りとした複雑な手工業技術は失われた。13~14世紀のクルガンからはもはやスレート製紡車、肉玉紅髓や金色ガラスのビーズ、三玉耳輪、粒形ビーズ、分銅、護符などは発掘されていない。また居住区跡からもキエフ時代に広く普及していたガラス製腕輪が消えうせた。同様に両取手つきの壺をはじめとする複雑な技巧を要する陶磁器もみられなくなる。キエフ職人の誇りとした仕切りを用いるエナメル塗りの技術は完全に失われた。エナメル製品自体は14世紀末からモスクワで、また仕切り型エナメル製法は16世紀になってやっと復活することになるが、それらは技術的にもまた画像の稚拙なことでもキエフ時代の製品とは比較にならなかった。エナメル技術とともに黒金象眼や単純な針金細工の技術すらも姿を消した。粒細工の技術も多彩色の化粧練瓦などもみられなくなる。そのうち針金細工は14世紀、化粧練瓦は15世紀末、黒金象眼と粒細工は16世紀になってやっと復活する。技術と資材とを奪われた都市にはしばらくの間石造建築も途絶え(所によっては100年間、ノヴゴロドですら60年間も新たな石造建築は行われなかった)、町の外観が一層みすぼらしくなったことも言うまでもない。(補注参照)

かくてロシア都市はその手工業とともにかつての経済的繁栄の基盤をも失った。都市と農村の経済的つながりは断たれ、外国との交易はおろか各地方間の交易も、大規模な生産活動も、一時的にはあれ途絶えたのであった<sup>16)</sup>。

16) 以上に関して、《Очерки Русской культуры XIII-XV веков》の Ремесло の章

以上に示したロシア都市の「殉難史」はもちろんロシア全土に同一程度にあてはまるものではない。ノヴゴロド、プスコフ、ヴィテプスク、ポロツク、モレンスクなどの北西諸都市は直接の破壊はまぬがれたし、ガーリチ等南西諸都市も被害は比較的軽かった。だがこれらの地方でもその後課せられた重い貢納のため、そして何よりもロシア全土をおそった長期の経済的停滞のため、発展のテンポは遅くなったのである。かくしてルィバコフによればモンゴルの侵入とその後のロシア支配は「西欧の先進諸国が急速に発展し始めたそのときに、ロシア文化の発達を150~200年間阻んだ」(695)のであった。

## 2

モンゴル侵入後の、15世紀中葉にいたるまでの農村およびヴォチナ(世襲領地)手工業を一瞥しておこう(第七章)。

既述の如く、モンゴル人の度重なる侵入は農村にとってよりも、都市にとって一層深刻な打撃であった。農村はいわば放置された。農村手工業は一部の職種と特殊な製品を除いては、農業と未分離のプリミティブな状態にあったために、タターの注目するところとはならなかった。以下に示されるように、農村においても手工業が時代とともに進歩したことは言うまでもない。だがそれはきわめて緩慢であった<sup>17)</sup>。ルィバコフによれば、キエフ時代の農村手工業技術の多くが19~20世紀にも本質的革新をみずにそのまま用いられていたという(543, 550, 556)。キエフ時代と比較して変化したのは家内副業の状態を脱して専門化した職種がふえたことである<sup>18)</sup>。だが都市手工業を主たる対象

(стр. 156-230)を担当している Б. А. Колчин の見解は興味深い。彼はこの時期のロシア手工業技術の単純化を、必ずしも複雑な技術が失われたことの結果とはみていない。たとえばナイフや骨細工などの場合には、このような単純化は急速に増大しつつある需要を充足させるための「合理化」と解すべきであるという(стр. 171-172, 211-213)。彼は粒細工や仕切り型エナメル技術の消滅も「生産法の奥義の喪失ないし技能の低下」とはみていない。(стр. 202-203) (以下 Колчин として引用する。)

17) ルィバコフ(558)は「農村手工業の技術的側面はわずかしこ変化しなかった。否、まったく何らの変化もなかった、とすら推定することができる」とも述べている。

18) ルィバコフ(558)は15世紀末のノヴゴロドのヴォツカヤおよびシェロンスカヤ州(пятна)の土地台帳から、29種の手工業職を列挙している。(もっとも土地台帳の伝

とする本稿では、農村手工業に関しこれ以上の検討を続けることはできない。リュバコーフに従いながら、この時代の農村・ヴォチナ手工業の歴史の変遷について要約するに止めておこう (591~592)<sup>19)</sup>。

1. 農村手工業の中心的職種（鍛冶・陶器製造）においては、モンゴル侵入以前と比較して大きな変化はなかった。
2. 新たに仕立職、靴工、大工や他の若干の職種が専門化した。
3. 以前鍛冶工が兼ねていた鋳造、貴金属細工業は、この時期農村では消滅する。都市の貴金属細工師 *серебряники* の製品が農村にも流入したからである。
4. 手工業が農業からますます分離したことが、耕作に従事しない手工業者数が増大したことから伺える。
5. 農産物・手工業製品の形で徴集されていた現物貢租が、15世紀中葉から貨幣払いに移っていく。
6. 15世紀中葉になると、農村における生産力の増大が、手工業者・商人聚落 *рядки* (「農村都市」) の発生を促す。これは以前からの都市を補完する重要な要素となる。
7. 14世紀中葉から複雑な設備と時には幾人かの協同を要する一連の農村工業（製鉄、<sup>20)</sup>製塩）が発展しはじめる。

える情報は、リュバコーフ自身が認めるように完全なものではない。)このうち新たに専門化したのは、後述する如く仕立職、靴工、大工、製鉄・熔鋳業などであった。Черепнин, «Образование». 303 は北東ルーシに関して、(製鉄業を除いて)同様な手工業職リストができる、と考えている。

- 19) 本節および次節の叙述に関して、リュバコーフ後の研究の代表として、Черепнин, «Образование» 第三章 (とくに第1~4, 第7節)。および上掲の Колчин の概説をあげておく。
- 20) 製鉄に関して一言。農民が副業として製鉄に従事したというのは中世ロシアの特性である。鉄鉱石から生鉄を得る技術は、鉄鉱石がルーシのほとんどの地方にも存在していたことで、広く知られていた。熔鋳炉は一般に農民が所有しており、それゆえ製鉄には一般に農民が従事した。都市の手工業者(鍛冶屋)はもっぱら加工を事とした。Колчин, стр. 157 сл.; Рыбаков, Ремесло, 124, 575 сл.; А. Л. Шапиро, «Проблемы социально-экономической истории Руси XIV-XVI вв.» Л. 1977, стр. 97. (ただしシャピロは製鉄業の鍛冶業からの分離が明確になったのは16世紀のこととしている。)

8. 地方によっては、特定分野において賃労働を利用して商品生産を行う場合があった。
9. このような工業地帯の出現は、今度は15世紀末に、農奴農民の労働力に依拠する副次的工業地帯の出現を促した。
10. 聖俗封建領主のヴォチナ経済においては、農民は賦役を課され、家内労働産品（羊皮、銑鉄、麻、亜麻等の原料ないし羊製品）が徴集されていたが、若干の地方ではそれらにかわって手工業労働が課されるようになった。
11. 14世紀後半から諸公や修道院のヴォチナは製粉用の水力動力を導入し、さらに一連の複雑な工業（製塩業など）を組織した。
12. 各ヴォチナは多数の奴隷（ホローブ）手工業者を抱えていたが、これはロシア経済一般の自然経済的性格による。
13. 15世紀後半にはヴォチナ所有者の多くは新経営方式に移行する。すなわち農民の現物貢租にかわって貨幣貢租を導入し、奴婢（屋敷奴隷）を貢租支払い人としていく。この経過は手工業者にも適用され、彼らはボサード民に転化する<sup>21)</sup>。
14. ロシア農村とヴォチナにおける生産力の発展は次の二時期に著しい。すなわち14世紀後半と15世紀中葉以降である。

### 3

続いて同時期の都市手工業に筆を進めよう（第八章）。

まず史料について一言しておこう。この時期の手工業技術に関する史料は、キエフ時代に比しても、その後の時代（15世紀後半以降）に比しても、少なくとも不完全である。記述史料は相かわらず手工業に関し語ることわずかである上に、考古学資料が激減したからである。この時期は考古学資料の相対的に豊

21) ルィバコーフ（589-591）は15世紀中葉からヴォチナ経済においてホローブ手工業者が「解放され」始め、やがて「自由な」手工業者となっていたと述べているが、この問題はより慎重に吟味されなければならない。「自由」の意味が定かでないし、最近では「15世紀ホローブ大量解放説」は否定されつつあるからである（石戸谷重郎『ロシアのホローブ』東京大明堂1980、序、第一、第三、第七の各章を参照）。

富なキエフ時代と、記述史料が急増する16～17世紀の間であって、いわば史料の谷間にある。中世都市ないし手工業に関する研究の多くがこの時代に関しては走り書き程度に止め、16～17世紀に集中しているのはこのような事情によるところが大きい。だが史料の欠如をそのまま手工業の欠如とみることは、リュバコーフも述べる如く誤りであろう。確かに史料不足のためにこの時期の手工業職種の完全な一覧表を作成することはできない。だがそれにもかかわらず、注意深くみれば、この時期にも着実な回復と次代への発展の歩みのあることがわかる。

まず全般的な特徴からみてみよう。モンゴル人の侵入とその後の支配によってひきおこされた手工業生産の停滞は14世紀前半まで続いた。14世紀中葉になると、ロシア経済の一般的活性化に促されて手工業にも上昇のきざしがみえ始める。14世紀後半から世紀末にかけて、ほとんどすべての分野で技術上の革新が観察される。その主なものは以下の点である（696）。

1. 水車の出現。以後水力動力が重要な役割をはたす。
2. 製塩用井戸の進んだ掘削法が行われる。
3. 大砲の出現。鉄への需要高まる。
4. 高価な羊皮紙にかわって紙が用いられ始める。この頃楷書体にかわり、行書体が一般化する。
5. 製本業のための仕事場の出現。
6. 複雑な装置を要する大型鑄造（鐘、のちには大砲）が始まる。
7. 銅製鑄物工芸品のための鑄造所出現。それと同時にキエフ時代の鑄型からの単なる複製は行われなくなる。
8. 貨幣鑄造始まる。
9. 針金細工技術の復活。
10. 生地彫り七宝生産の復活。
11. 石造建築盛んになる。

史料不足から以上の点が断片的に指摘されうるにすぎないが、これらの諸点からだけでも、長期にわたった停滞が14世紀後半に打ち破られ始めたことが

理解されよう<sup>22)</sup>。

続いて主な分野についてみてみよう。まず鍛冶業である。

鉄および鉄製品はほとんどすべての産業分野と関連している。それゆえ需要はいつの時代にも多くあった。だが14世紀中葉、需要は飛躍的にふえた。水車の出現は、心棒、受金、多量の留め金、種々の鉄おおいを不可欠とした。塩井を深く掘る製塩方式の採用は、鉄製の穿孔器、巻上器、滑車などの存在を前提とした。海水からの製塩に際しても、12世紀に一般的であった釜を用いて行う方法にかわって、大型の焼鍋が用いられるようになった。河川・海上航行の発達も、鉄鎖、錨、碇等の製造を促した。14世紀末に始まる大砲製造も都市の鍛冶工の仕事を一層多忙にした。鍛鉄製の砲はその後ほぼ一世紀間優勢をしめ、15世紀末になって、銅製の鑄造大砲が出現するに及んで、その歴史的使命を終える。都市商業の活性化も鉄製品（天秤棒、錘、樽わく等）への需要増をもたらした。

都市鍛冶業の専門化の程度は史料不足から容易に分りにくい。ただ若干の断片的記述から、13世紀のノヴゴロドなどに、鍛冶屋、楯職人、鋸細工師、釜職人、釘職人、銃職人、軍帽職人（киверники）、柄杓職人、それにおそらくは甲冑職人などの居たことが知られるのみである。

次に鑄造業についてみよう。中心は銅の鑄造であるが、なかでも重要なのは、鐘や大砲などの大型鑄造業であろう。小型の鐘の鑄造はすでにキエフ時代から行われていたが、モンゴル侵入後の北東ルーシで新たに行われるようになるのは14世紀に入ってからである。これにたいし大砲の場合は、既述の如く、鑄造の銅製大砲が製造されるのは15世紀後半のことになる。おそらくは世紀半ばにまずトヴェーリで西欧からの技術を用いて鑄造が始められ、その後モスクワで大規模に行われるようになった。リュバコフは、ポーロニア出身のイタリア人アリストーテリ・フィオラヴァンティがモスクワに大砲の鑄造技術を持ちこんだとする通説に否定的立場をとっている。彼はさらに、鐘や大砲がこの時

22) А. Н. Кирпичников. «Военное дело на Руси». Л. 1976 стр. 11, 95, 98-99 は軍事技術に関し「衰退」は起らなかったと主張している。ロシアの武器にたいするタタール側からの影響についても著者はできるだけ低く評価しようとしている。

期実際にどのようにして鑄造されたかを再現してみせている (607~610)。

続いて貴金属細工業であるが、この分野は他の分野の場合に比して、史料状況は若干よくなっている。13-15世紀の製品が現在も数百点残っているからである。そのうち製作年代が明らかとなっているものが約20点、製作者名の知られているのも8点ある。リュバコーフはこれらの製品を検討しながら、貴金属細工業の歴史を次のように描いている。

モンゴル侵入後14世紀初頭までは、貴金属細工の生産はきわめて少なかった。技術的にも侵入以前の製品を機械的に複製する(旧型を用いた鑄造法で)のが精々で、進歩はおろかむしろ退歩した。<sup>23)</sup>活性化するのは14世紀第二四半期になってからである(ノヴゴロドの場合)。北東ルーシ(モスクワ、スーズダリ、トヴェーリなど)では、14世紀中葉が発展開始期になる。世紀末になると貴金属細工師たちは、すでに針金細工、エナメルぬり、表層鑄造 *накладное литье*、打出模様等の技術を回復していた。この時期の製品には東方(アラブ、イラン諸国)、西欧(ゴチック様式)、ビザンツからの影響が認められるが、影響を一方的なものとして理解してはいけない。15世紀、とくに世紀後半になると、発展は一層著しくなる。この時期に製作されたものは、その後一世紀半にわたってロシア貴金属細工師らの製品のモデルとなった。この時期、製品に作者の署名を付す習慣が、およそ二世紀間の中断の後復活する。技術水準が上り、手工業者の自覚と誇りが高まってきたことの表われであろう。

リュバコーフはさらに、製陶業、建設業、木材加工業、織物業、貨幣鑄造、製本業について検討しているが、時には興味深い観察がみられるにもかかわらず、史料不足からその叙述は一般的なものに止まっているので、ここでは省略する。

さて以上に見たように、14世紀後半から始まった手工業の発展は15世紀に入っても続いたのであったが、その世紀前半における技術上の発展はそれほど

23) リュバコーフ (627) は「技術的手法はモンゴル以前の時代のそれとあまり変らなかつた。ただ時折若干の技能の喪失が感じられた」と述べている。Колчин 202-203も既述の如く、単なる水準低下とは考えていない。が一般的低下はリュバコーフ自身の記述全般からも明らかである。

めざましいものではなかった。わずかに建築用資材として白石にかわり煉瓦が用いられるようになったこと、銅の鑄造大砲の出現、軟金属の圧延と薄鉄板の鍛造が行われるようになったこと等が革新であったにすぎない。おそらくヴァシーリー二世治世の内乱など政治的不安が大きな原因であった。目ざましい発展がみられるのは15世紀後半、イヴァン三世のモスクワによる北東ルーシ統一が進められて以来である。だがそれを迎えることはもはや本稿の対象とする範囲をこえる。

## 4

つぎにこの時代の都市手工業者の諸側面に関し述べなければならない(第九章)。

手工業者は都市のなかで一団となって住んでいたことが町(улица)名(鍛冶町、陶工町、鎧町、楯町等)や地区(конец その他)名(大工区、陶工区等)、また市場店舗群 ряд や守護教会の存在等から推察される。これはのちに述べることになる手工業者団体の存在をめぐる問題とも関連してくる重要な点である。

さて手工業においてもっとも一般的な生産単位は仕事場 мастерская である。中世都市手工業者の多く(靴工、毛皮匠、鞍師、マント職人、鞍帯職人、カフタン職人、織匠、麻布職人、弓袋職人、櫛職人、柄杓職人、轆轤職人、弓職人、製本職人、帽子職人、イコン画家など)は、このような住宅兼用の仕事場において生産に従事した。住宅と別の場所で働く職人には、仕立職人(注文主の家で仕事をし、ときには自宅をもたず他人の家に寄食することもあった)、建築職人(大工、城壁職人、石工)、破壁具(石投器)職人、船大工などがいた。職種によっては独立した仕事場を必要とする場合があった。たとえば鞣皮工、羊皮職人、колодей(?), ビール醸造人、パン焼職人、白パン職人、釘職人、鎧職人、錠前職人、鉋職人、幕職人、陶工などは特別な装置や建物(大樽、灰汁桶炉、窯など)を必要とした。またある場合には仕事場が原料所在地の付近に集中するような例もあった(製鉄用溶鉱炉、挽臼製造所、煉瓦工場、樹脂工



場、製塩所など)。また鍛冶屋、鋳物工場の如き火を用いる仕事場は、漸次住宅地区からきり離されて郊外に集中するようになっていった。また手工業者の多くはその仕事の一部を市場に存在する自己の店舗で行っていたと推察される。

一つの仕事場で働く職人の数に関しては、それをとくに明示する史料はない。技術的観点から5~6名ないしそれ以上の働き手を必要とする大型鉄製品(塩井掘削機の如き)の鍛造や溶接業あるいは製塩業、鐘・大砲鋳造業等を除いて、一般的には1~3名が働くだけの小規模工業が普通であった。それゆえ仕事場内での労働の分業はほとんどみられなかった。中世においては職人(親方)が自己の専門とする製品を始めから終わりまで一人でやりとげるのが一般的な形態であった。もっとも仕事場すなわち生産手段の所有者が何らかの助手職人を従えていたことは普通であった。これをいわゆる西欧流の「職人」подмастерье や「徒弟」ученик とみなしうるかどうかは、「徒弟制度」の存在の有無として論争の対象となっているが、これについては後述する。

つぎに都市手工業者の労働形態について検討しよう。

まず手工業における賃労働についてみると、史料はとくに建築職人について多くの例を伝えている。たとえば、『プスコフ裁判文書』には建築職人に報酬を支払わない不誠実な雇主にに関する条項や、あらかじめ契約に定められた通りの仕事をしない職人をめぐる条項が含まれている(第39, 41条)。<sup>24)</sup> なかでも興味深いのは、リュバコーフがプスコフ第一(一部は第二)年代記をもとに行っている観察である(707~712)。彼によれば、この年代記には石垣、石造教会、木材舗装道路、家屋等の建築、屋根葺きなどに関する賃労働の例がみられる。これらの労働にたいする支払い主は公的機関(「全プスコフ」, 「全プスコフ人」)ないしは個々の注文主(教会や修道院など)であった。場合によっては、プスコフ住民のいくつかのグループ(居酒屋、肉屋などの)が費用を共同で負担することもあった。職人はときには、200~300人からなるアルテリを組織して仕事にあたったが、そのほとんどはもっぱら賃労働により生計を支えていた人々

24) «Памятники права феодально-раздробленной Руси. XII-XV вв.» («Памятники Русского права» Вып. II), М. 1953, стр. 291-292.

であった。この点でプスコフは、農民やホローブを用いるのが一般的であった当時のロシアにあって、特殊な例外をなしていた。さて、工事代金が明らかになっている17例のうち労働者数、工期までも分っているのは3例だけである。最初の例はプスコフのクレムリ城壁建築工事で、工期は1421年5月26日から1424年7月7日まで（これを約1120日と計算する）、支払総額は1000ルーブリ、労働者数200人である。休日、夏と冬の労働日・労働時間の多寡、各労働者の質（熟練度）等を考慮にいれずに（史料の欠如）単純に計算すると、一人あたりの平均日当は $\frac{1}{224}$ ルーブリとなる。第二の例はグドフ城の石造城壁建築工事で、工期は1431年の5月17日から11月1日までの163日間で、工費は300ルーブリ、労働者数300、一日一人あたりの平均賃銀は $\frac{1}{163}$ ルーブリである。第三の例はプスコフのクレムリ城壁工事（鐘楼、城門建築を含む）で、工期は約3年（1463～5年）、費用175ルーブリ、労働者数80、平均日当一人あたり $\frac{1}{494}$ ルーブリである。

以上三例はおおよその目算を与えるにすぎないが、もし休日等の休業日を考慮にいればその分だけ平均賃銀は高くなる。平均賃銀がもっとも高いのは1431年の例であるが、これは工期が日の長い夏期を中心とするものであったことが一因であろう。第一と第二の例における平均賃銀は、当時のプスコフで流通していた銀ルーブリの一小単位（деньга）にほぼ一致する<sup>25)</sup>。第三例における賃銀の低さは、熟練労働者の割合の低さ、賃銀水準の一般的下落などの原因によるものであるよりは、前年の食糧品価格の下落と関連があると考えられる。労働者が賃銀とは別に、食糧品を雇主たるプスコフから供給されていたとも考えられる。ところで、上記の賃銀はどの程度の生活を保障したであろうか。15世紀プスコフでは1 деньга で次のようなものが買えたという。大型円パン1個（1455～62年）、塩13フント（1フント=0.41kg、塩の安価な1461年）、蜜酒2.5フント（安価な1467年）、雄羊 $\frac{1}{6}$ 頭（14世紀および1467年）、燕麦

25) 1ルーブリは216 деньг に相当する。1ルーブリは銀204.756gであるから、1 деньга は銀0.947gということになる。もっとも15世紀には銀含有率は15%下落したという（リュバコフ710）。См. «Очерки Русской культуры XIII-XV веков» 337-338.

約0.5 プード (1 プード= 40 フント, 豊作年, 1464, 67, 76年), ライ麦約0.5 プード (豊作年1434年)。凶作, 戦争, 火事, 疫病, 洪水等により生活の脅かされることの多かった都市労働者にとって, 上の賃銀はきわめて低水準のものであったと考えられている。

ところで賃労働の割合は決して大きいものではなかった。大部分の都市手工業者は自己の仕事場で働いた。生産はキエフ時代同様, 注文生産と市場むけ生産とに分かれていた。だが注文のみによる生産は大都市では副次的になっていた。14~15世紀都市で市場むけ生産が行われたことは疑いない。ノヴゴロドなどでは装飾工芸品の鑄造による「大量」生産も行われていた。ただ市場むけ生産がどの程度行われたかを明らかにすることは困難である。キエフ時代に手工業は商業から分離し, 多くの製品が行商人によって国の隅々にまで売り捌かれていたことが知られているが, モンゴル人侵入後についてこの点をはっきりしない。ただいくつかの史料から, 14世紀にこの種の行商人が再び姿をみせ始めたことが推察できる。事情が以上の如くであるから, 手工業と商業との分離が十分になされていたと信ずることはできない。商人が存在したことはもちろんであるが, 手工業者も相当程度自己の製品の販売にあたっていたと考えられる。おそらく都市外の農村の市 ярмарк や辺鄙な地方の市場 торжок には都市から商人が出かけたが, 都市内部ではいまだ手工業者と商人の分離は不十分で, 専門商人の出現は遅れた。この点史料がしばしば手工業者を商人と呼び, また商人に分類していることは興味深い。もっともこのことは手工業者の市場むけ生産がかなり普及していたことをも示している。15世紀になると手工業者の一部は都市市場で製品を商うのみならず, 対外貿易にも進出し, やがて完全な買占め商人へと成長していった。

## 5

以下はモンゴルの侵入とその後のロシア支配がロシアに与えた被害の程度と実態に関する若干の補考である。

これまでこの問題に言及してきた研究者は多い。だがそのなかでも代表とし

て、G. ヴェルナツキーと B. B. カルガーロフの二名をあげることに異存はないであろう。

ヴェルナツキーは、とくにその『モンゴル人とロシア』<sup>26)</sup> (1953) において、モンゴル人支配の前のロシア (キエフ・ルーシ) と後のロシア (モスクワ・ルーシ) とではその政治的構造と精神生活の性格が非常に異なっていることを力説したあと、モンゴル支配がロシアに与えた影響を、経済生活、政治・行政・軍事制度、社会構造、精神生活等の諸側面にわたって考察している。彼は結局のところ、強力な専制権力と農奴制とをその本質とするモスクワ国家をモンゴルの継承国家と位置づけることによって、ロシアにたいするモンゴルの影響を最大限に認めたのであったが、その所説には個々の点で興味深い点が認められるにせよ、全体としてはわれわれを納得させるものではない。ここではそれを全面的に検討することはできないが、彼の立論の前提と結論に関わる二点のみを記しておく。まず第一に彼はキエフ時代を自由な社会と、モスクワ時代を専制と農奴制の社会——この体制を彼が何か否定的なものとはみていないことに注意すべきであろう——ととらえ、その間のモンゴル支配をこの変化の主要な原因と考えているのであるが、この場合の「自由」の意味が十分に明らかにされていない。それは、とくにモンゴル支配がなくとも、早晚失われる「自由」でしかなかったことを彼は見抜いていない。第二に、彼はモンゴルの侵入と支配がロシアにとってまず何よりも破壊と厳しい収奪を意味したことを十分に理解していない。それゆえモンゴル支配下のロシアがその政治・経済等の潜在力を著しく低下させたことに十分に注意を払っていない。このことは彼に誤った結論を抱かせる結果になっている。すなわち、モンゴル支配こそ強力なモスクワ専制国家の形成にあずかって力あったという結論である。この結論自体がそもそも誤っているのみならず、それを導き出す方法も説得的でない。一方ではモンゴルの支配制度が影響を与えたことが力説され、他方ではモンゴルとその継承国家等からの防衛の必要性がモスクワをして強力な専制国家にした、とされているからである。後者は影響とは到底よびえない。また専制国家 autocracy

26) Vernadsky, «Mongols and Russia» とくに第5章 (333-390 ページ)。

と言う場合、国家として強大だということと、王権の性格が専制的であることとは一応区分して考えなければならない。王権の性格の問題においてはモンゴルの影響も問題になりうるであろう<sup>27)</sup>。

ヴェルナツキーの著作は、いずれにせよ、モンゴル支配のロシアへの影響について論じたものであった。影響の問題は非常に複雑である。一国が他国の政治・経済・社会構造上の性格を本質的に変えてしまう、ということは一体いかなる条件下で、いかにして可能なのか、そのメカニズムを問うことなくして大胆な主張を行うことは、危険である。

モンゴル人の侵入がロシアに与えた被害について、一步ふみこんで知りたいと願う本論にとって、より興味深いのはカルガーロフの研究である<sup>28)</sup>。カルガーロフは、バトゥの侵入とその後の度重なるモンゴル・タタール人の侵略がロシアに与えた直接的被害を、都市の破壊、農村の荒廃、経済的収奪、文化の衰退という側面からとらえる。彼はさらにモンゴル侵入が原因で起った大規模な住民移動、対外関係、貿易の中断ないし性格の変化、侵入の経済的・政治的影響などに論及している。ここではモンゴルの侵入によってひきおこされた都市の破壊と農村の荒廃についてとくにみることにしよう。都市の破壊については本論でもすでにふれておいたので、カルガーロフによりながら二点だけをつけ加えておく。第一に、バトゥの侵入がロシア都市にとって悲劇的な結果をもたらしたのは事実だが、その後の度重なるタタール軍の侵入も同様に、きわめて大きな被害をもたらしたということ。これは言うまでもなく都市のみに関することではない。ロシア国土の回復を妨げ、その経済発展にはかり知れない悪影響を及ぼしたのである。第二に、ロシアの都市(と国土)はすべてが一樣に破壊されたわけではない。ウラジーミル、スーズダリ、ムーロム、ペレヤスラヴリ・ザレスキー等の、タタールの侵入を何度も蒙った地方に存在した諸都市

27) G. ヴェルナツキーの見解にたいするソヴェト側からの批判をあげておこう。Н. Я. Мерперт и В. Т. Пашуто による書評 (《ВИ》 1955, № 8, стр. 180-186) および Л. В. Данилова, Русское централизованное государство в освещении буржуазных историков США, в: «Критика буржуазных концепции истории России периода феодализма», М. 1962, стр. 237 сл. また, Ch. J. Halperin, George Vernadsky, Eurasianism, the Mongols and Russia, 《Slavic Review》 41-3 (1982) をも参照。

28) Каргалов, «Внешнеполитические факторы» のとくに第4章 (173-217 ページ)。

は、その荒廃の度合も大きかったのに対し、ドミトロフ、ウグリチ、モスクワ地方、トヴェーリ地方の諸都市は、被害の程度が比較的軽くすんだ。

さて農村の荒廃についてであるが、カルガーロフは、種々の年代記の証言を引用することによってパトゥの侵入とその後の度重なるモンゴルの侵入がロシアの農村にとってもきわめて悲劇的な出来事であったことを示したあと、その被害の度合を具体的に把握しようと努めている。農村の荒廃というのは要するに、農村人口の減少（殺害、連行、他地方への逃亡移住）と村落および耕地の放棄・消滅のことを意味するが、そのうち農村人口の減少がどの程度であったのかをある程度の正確さをもって述べることは不可能に近い<sup>29)</sup>。他方農村居住地の減少率については、ある程度これを明らかにすることができる。たとえばカルガーロフは、全北東ルーシについて知られている371のモンゴル侵入以前の居住地のうち105が、遅くとも13世紀にその存在を止めていること、6が同時期に（もっとも一時的に、2-3世紀の間）打ち捨てられ、13世紀を無事乗りきって存続（14-15世紀まで）したのは46にすぎなかったこと（他はモンゴル侵入以前にその存在を止めたか、あるいはいつ荒廃地となったか不明）を指摘している。この数字は全北東ルーシに関するものであって、もしノヴゴロド地方やトヴェーリ公国、ヴォルガ沿岸のヤロスラヴリやウグリチなどの地方を別にすれば、13世紀に存在を止めた居住地の割合はさらに高くなるという（88が13世紀に荒廃地化し、この時期を通じて存続しえたのは9にすぎない）。この数字はもちろん、いかなる意味でも完全なものではない。モンゴル以前の全農村居住地が知られているわけでないし、分っているものでも、いつ放棄されたのか明らかにしえないことが多い。だがおおよその傾向を知ることはできる。

カルガーロフはさらに B. B. セドーフの研究<sup>30)</sup>をも紹介している。それによると、中部スモレンスク地方には、11-13世紀の居住地が89確認されるが、

29) たとえば、そもそもキエフ期の人口がどのくらいであったのかについても良い研究は欠如しているのが現状である。См. В. Д. Назаров и др. Проблемы общественно-политической истории, «ВИ» 1976-4. стр. 26.

30) В. В. Седов, «Сельские поселения центральных районов Смоленской земли (XIII-XV вв.)» («Материалы и исследования по археологии СССР», № 92.) М. 1960.

14-15世紀にはそれが52に減少しており、しかもそれらの居住地も戸数においては各々モンゴル侵入以前の約半数になっているという。またヴォルガ中流域(ウグリチからモロガ川にいたる)には、「初期封建時代」の村落が29発見されているのにたいし、14-17世紀のは8にすぎないという。ウグリチ地方においては、1955-1956年の発掘で明るみに出されたキエフ時代の16の農村居住地は、すべてが13世紀に破壊されていた。発掘者のM. B. フェヒネルはこれを「タタールの侵入」と結びつけているという。同様の事象はオカ川上・中流域、デスナ上流域、セイム、プショール両川流域などにも観察されるという。

カルガーロフは、さらに南・南東ルーシにおいても、モンゴル以前の居住地の廃墟(городищеや селище)が大量に発掘されていることを伝えているが、カルガーロフのこのような研究方向を一層推し進めたとみられるのはC. ゲールケである。ゲールケはその論文「初期および盛期中世東ヨーロッパにおける荒廃期」(1968年<sup>81)</sup>)において、「13世紀の大荒廃期」についても詳しく検討している。彼はソヴェトの研究者の様々な研究成果を利用しながら、北東および南ルーシにおける荒廃化現象の拡大と規模について、個々の都市と地域に則して具体的に検討し、さらに荒廃化の程度を割り出し、最後に13世紀における荒廃化の原因論に筆を進めている。

ゲールケによると、北東および北西ルーシの場合、モンゴル侵入以前の居住地が13世紀にその存在を止めた割合は59%以上になる。これは言うまでもなく平均値で、地方によっては大きな差がある。たとえば、ノヴゴロド地方の場合この割合は25%に下る。北東ルーシ全体としては53%である。リャザン地方のプロニャ河畔だけだどこの割合は85%になる。中部スモレンスク地方では54%である。ところでこれらの数字はいくつかの理由から、そのまま現実を反映したものとはみなされない。ゲールケは種々の事情を勘案して、結局北東ルーシに関しては33%から50%が13世紀に廃墟になったと結論づけている。

南および南西ルーシに関してはどうであろうか。ゲールケによると、同様に

31) C. Goehrke, Wüstungsperioden des frühen und hohen Mittelalters in Osteuropa, in: «Jahrbücher für Geschichte Osteuropas». Bd. 16, H. 1. (1968), SS. 9-52, とくに30-52.

激しい破壊にさらされた南・南西ルーシに関しては、北東ルーシに関してみられたような具体的な資料は欠けている。わずかにチェルニゴフ公国の北部に関してのみ13世紀における荒廃化の程度が推測されうるにすぎない（40の居住地のうち31、すなわち77.5%が13世紀に存在を止めている）。そこでゲルケは、事情が比較的明らかとなっている都市の荒廃化の問題と近隣諸国（ポーランド、モラヴィア、ハンガリー）におけるタタール軍による破壊の状況を比較史的に考察することによって、南・南西ルーシにおける荒廃化の明確な把握に努める。それによると、13世紀の南・南西ルーシにおける荒廃化の割合は50-66%と見積られる。その際下限の50%となるのはヴォルニニとガーリチ地方、上限の66%に見積られているのはキエフ、オカ川上流域、そしておそらくはポドーリエ地方もそうである。ペレヤスラヴリ地方はこれよりさらに高い割合になるという。

ゲルケは以上に示されたような13世紀ルーシの「大荒廃」の主たる原因をモンゴル人の侵入に求める「タタール理論」の正当性を肯定して、その論文を終えているが、この結論はそれ自体としてはきわめて説得的である。問題は、ゲルケ自身認識しているように、上記の割合をより正確なものにすることであり、「タタール理論」がロシア史全体のなかでもつ意味を見究めることであろう。だがいずれの課題も特別の探求を要するものである。

タタールの侵入がもたらした被害に関するこの補考では、B. T. パシュートの論文「古ルーシにおける飢饉年」<sup>32)</sup>（1964年）にもふれておかねばなるまい。この論文はとくにタタールの侵入の結果に関するものではなく、10世紀中葉から14世紀中葉にいたる約400年間のロシアにおける「飢饉年」に関する、より包括的な研究である。パシュートは年代記をはじめとする様々の史料から、飢饉に関する直接・間接の情報を丹念に集め、年表を作成している。そして飢饉をひきおこした原因を問い、飢饉による悲惨な結果を明らかにする。彼の到達した結論は以下の如くである。飢饉年がロシアにもたらした不幸は何よりも

32) В. Т. Пашуто, Голодные годы в Древней Руси, в: «Ежегодник по аграрной истории Восточной Европы 1962 г.» Минск 1964, стр. 61-94.



当時の社会的・政治的諸要因によるところが大であった。その意味では、ロシアの経済的後進性の原因をその厳しい自然的・地理的条件に求めて、ロシアを他のヨーロッパ諸国と区別しようとする西欧の研究者の見解は誤っている。ロシアの特殊性はむしろ、遊牧民によって不断に侵略と破壊を蒙った点に求められる。

このような立場に立つパシュートにとって遊牧民、とくにタタールの侵入が大きな意味をもつことは明らかである。彼は言う。「タタール・モンゴルの侵入とその軌は、検討中の現象(飢饉年)の歴史において質的な境界となる。この時からルーシにおける飢饉年は、他のヨーロッパ諸国におけるこの種の不幸と、本質的にまったく異なるものとなったと考えることができる。というのもこれらの諸国は、あるいは(タタールの)侵入をまったくうけなかったか、あるいは(リトワ、ポーランドその他若干の国々の如く)はるかに少い被害しかうけなかったからである。」<sup>33)</sup>パシュートの伝える若干の統計的数字を引用しておこう。

ロシアにおける飢饉年は以下の通りである。1024-1332年に関して。まず全国的な飢饉年——1124-1128, 1145-1146, 1161, 1230, 1271-1274, 1279, 1283-1284。ついで北東ルーシの個々の地方における飢饉年——1024, 1070年代, 1187-1188, 1214-1216, [223-1224, 1227-1231, 1251, 1303, 1309-1310, 1314-1316, 1332。南西ルーシに関して——1090年代, 1103, 1164, 1193, 1195。以上は言うまでもなく記録がなされている場合だけである。パシュートによれば、以上から308年間に計42年が飢饉年で、7年半に1年は飢饉を経験したことになるという。この計算自体は、彼も認める如く正確なものではないが、おおよその目安にはなろう。

次にモンゴル・タタール人の侵入は、バトゥのそれのあとも引き続いた。北東ルーシへの侵入は、1252, 1275, 1281, 1282, 1293, 1317, 1327年と続き、南西ルーシへは、1258-1259, 1277, 1280, 1283, 1286-1287年などに侵入している<sup>34)</sup>。

33) Там же, стр. 69 (最初の二つの括弧は粟生沢のもの)。

34) Каргалов 193によると、1273-1297年の25年間にタタールの北東ルーシ襲撃は15回におよんだ。

飢饉年には多くの住民が斃れた。必ずしもタタールの侵入と関連しないが、パシュートのあげる数字を拾っておこう。1092年キエフでは4カ月の間に7,000人が死亡した。1230年、スモレンスクの共同墓地に32,000人が運びこまれた。同年のノヴゴロド。まず3,030人を埋葬。ついで同様の共同墓地が2箇所設けられた。この時ノヴゴロドでは全部で46,000人が斃れた。1283年リヴォフ地方では、タタール軍の何週間かの宿営の後、12,000人が餓死した……………

ロシアにおけるモンゴルの影響の問題という大問題がわれわれの前にある。だがそれに取り組む以前にまだしなければならない基本的な作業が残っているように思われる。<sup>35)</sup>

- 35) A. Eck, «Le moyen age Russe». Paris 1933 (Slavic Printings and Reprintings. vol. 99, The Hague/Paris 1968) p. 59 は二世紀半にわたるモンゴル・タタールのロシア支配期がいかに困難な時代であったかを示すために、次のような数字をあげている。この間に行われたタタール・ロシア戦争45回、その他無数のタタール人の襲撃(その際70の都市を破壊した)、対リトワ戦少くとも41回、ドイツ騎士団との戦—30回、その他対スウェーデン、ヴォルガ・ブルガール等々との戦—44回以上、内戦—90回(1228—1468年)。23回の疫病(黒死病など、1308—1448年。うち1348—1448年の100年間に20回)。このうち少くとも4度(1363, 1409, 1420, 1423)は全土をおそった。29回の飢饉(1251—1456)。他の時代と比較してからのことでないかと断定はできないが、タタールの侵入を含めて多難な時代だったということであろうか。なお既述のC. Goehrkeは《Die Wüstungen in der Moskauer Rus'. Studien zur Siedlungs-, Bevölkerungs- und Sozialgeschichte》, Wiesbaden 1968において引き続き14世紀以降ピョートル大帝即位までの荒廃化現象を考察している。また本稿では検討できなかったロシアにおけるタタール支配の意義、の問題について、最近アメリカのCh. J. Halperinが精力的に研究を進めていることを付記しておく。たとえば、Ch. J. Halperin, *Scratch a Russian. . . . Thinking about Russia and Mongols*, A Paper presented to the Midwest Slavic Conference, Minneapolis, May 5, 1979; id. *Soviet Historiography on Russia and Mongols*, 《Russian Review》41-3 (1982), pp. 306-322. また最後に、モンゴル侵入がロシア都市の発展に及ぼした影響に関するЮ. А. Кизилловの最近の論考, *Городской строй России XIV-XV вв. в сравнительно-историческом аспекте*, «ВИА» 1982-12, стр. 20-33にもふれておきたい。彼はロシア都市の性格がモンゴル侵入後も基本的には変わらず、復興も早かったことを主張しながら、その限りでのロシア都市の特殊性を西欧都市と比較しつつ論じている。
- 補注) Н. С. Борисов, *Русская архитектура и Монголо-татарское иго (1238-1300)*, «Вестник Московского Университета» История, 1976, № 6, стр 63-79はモンゴル侵入が13世紀ロシアの建築業に与えた影響を考察している。それによると、「他の芸術分野以上に安全と平静を必要とする建築は何よりも一番モンゴル侵入に苦しんだ」が、それは直接的破壊や職人の拉致によるよりは、むしろ「モンゴルが様々な手段を通じてロシアの地からその富の相当部分を吸いあげた」ことによっていた。ロシアの「恐るべき零落」が建築という大規模の事業を不可能にした、というのである。建築の再開はわずかの例外を除いて、13世紀80年代になってからのことであった。